

## 中国とアジア世界の環境問題に関する方法論的考察

榎根 勇

(愛知大学)

近代化への道を遅れて歩き出した中国とアジア世界が、先進工業国が経験したような環境問題の発生を見ることなく「次なる社会システム」の構築に向かって発展していくために、どのような方法が在りうるかについて、主として日本の環境問題の歴史を参考にして、哲学的・方法論的に論じた。その要点を箇条書きでまとめると以下ようになる。

1. 環境問題は、基本的には、自然と人間の関係は如何にあるべきかを考える問題である。近代科学の基礎になったデカルト的二元論では、客観的な認識をえるために、人間（精神・主体）と自然（肉体・客体）は明確に分離された。しかし近年の多くの研究が明らかにしているように、両者は相互に作用し合っており、独立した二実体として明確に分離できるものではない。科学技術の側からだけでは環境問題を論じることのできない理由がそこにある。
2. インド、中国、日本を含むアジアの東半分の地域には、自然と人間は分離できないものであるとする哲学が古くからあった。また、まだ科学的な証明はなされていないと思われるが、世界の人々は「環境が悪化すれば人間（の心）も悪化する」という常識を共有している。人々が、環境を保護しなければならないと考える理由は、「健全な生活を送るためには、健全な環境が必要である」と考えているからであろう。
3. 環境とはわれわれを取り囲んでいるものすべてを指す。環境には、自然的環境のほかに、経済・政治・狭義の社会・文化を含む社会的環境がある。人間の心は、自然のおよび社会的環境との相互作用で育まれる。
4. 人間は欲望の充足を望み、近代科学技術はもっぱらその欲望を満たすための道具に使われてきた。その傾向を煽っているのが近代経済システムである。これまでの経済学は、環境の問題をまともに考えてはこなかった。欲望に対抗できるのはモラルであるが、モラルは心にかかわる問題である。環境問題は、欲望をモラルで克服できなかった結果として出現した。
5. 環境問題の原因解明に、自然科学は重要な役割を果たしてきたが、原因が明らかにされただけでは、環境問題が解決されたとは言えない。いわゆる「環境科学」の限界がここにある。環境問題は科学技術の問題であると同時に、その原因を生んだ政治問題でもあり、経済問題でもあり、社会問題でもあり、さらに文化問題でもある。この点に、環境問題の複雑さと、解決の困難さがある。宇宙船地球号という考えが提出されてから、すでに30年以上が経過しているが、地球環境問題はむしろ悪化の傾向にある。
6. 最近の「エコロジカルな経済学」には、環境問題を経済の問題として取り組もうとす

る意欲がみられる。「エコロジカルな経済学」の目指す社会では、環境税、贈与、NGO・NPO活動、パートナーシップなど、新しい法や制度が必要になる。それらの実現には、トップダウンとボトムアップの両方のアプローチが不可欠である。

7. 物質的満足は人間の間間目的にすぎず、究極目的は、人間の「しあわせな暮らし (Well-being Life)」の実現にあるとする考えは、国連などの活動を通じて世界に広まりつつある。「しあわせな暮らし」を実現するためには、価値の問題には踏み込まないという、これまでの自然科学の基本にあった価値中立性を見直しと、自然科学、社会科学、人文学の緊密な協力が必要になる。
8. それは言い換えれば、「しあわせな暮らし」を実現するための「新たな知」の創出が求められているということである。その知が「科学」と呼びうるものであるか否かは、今のところ分からない。何をもち「しあわせ」や「健全」と考えるかは、哲学や、経済や、政治や、文化にかかわる問題である。
9. 先進工業国は、環境問題が主要な原因となって、「次なる社会（ポスト近代社会？）システム」に向かって、現在の経済社会システムを再構築する方法を模索している。しかし、まだ明確な「次なる社会システム像」は明らかにされてはいない。先進工業国と発展途上国は、「次なる社会システム」の実現を目指して、いま同じスタートラインに立っていると考えることもできる。
10. 中国とアジア世界には、先進工業国がこれまでに経験した様々な環境問題を、先行する人類が経験した「自然と人間に関する貴重な実験結果」として学ぶことができるという、近代化への後発性に由来する利点がある。COE-ICCS 環境グループの目指している「環境改善技術の体系化」はその第一歩になると考えられる。

なお、本論文は全体でA4約50頁の長いものになったので、以下にその[目次]だけを記す。本論文の全文は「2004年度COE-ICCS国際シンポジウム報告書」で印刷公表される予定である。

#### 中国とアジア世界の環境問題に関する方法論的考察 [目次]

- 1 三つの問題提起
  - 1) エコロジーと資本主義的生産のコスト：出口なし
  - 2) 定方正毅の「トンネルルート」をめぐって
  - 3) 日本学術会議の「声明」
  - 4) 科学と哲学の問題
- 2 環境問題の本質
  - 1) 自然と人間の関係性
  - 2) 環境とは何か

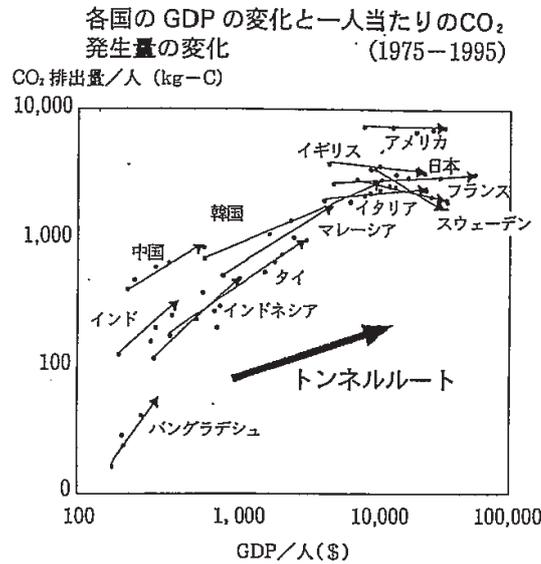
- 3) 環境危機の警告をめぐって
- 4) 日本の環境問題から学んだこと
- 5) 地球環境問題から学んだこと
- 6) 環境を改善するための科学（または学問知）
- 3 近代科学が見落としたもの
  - 1) 自然の価値
  - 2) 心の科学—主観と客観のつながり
  - 3) 科学の価値中立性
- 4 経済と環境の相互作用
  - 1) 外部不経済としての環境問題
  - 2) 贈与とパートナーシップ
  - 3) エコロジカルな経済学
- 5 「しあわせな暮らし Well-being Life」の実現
  - 1) 「アジア的価値」と普遍性について
  - 2) 「次なる社会システム」を実現させるための「知」について
  - 3) 「健全な自然」という概念について
  - 4) 「環境改善技術」について

文献

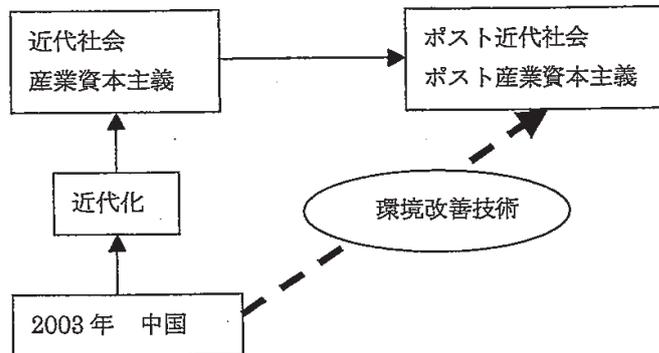
(英語文献)

(日本語訳のある外国語文献)

(日本語文献)



A. 定方正毅(2003)の提案するトンネルルート



B. 近代社会をバイパスしてポスト近代社会を目指す環境改善技術

環境改善技術 (EKT) とは、持続可能な社会の実現を目指す環境にやさしい技術をいう。

すなわち、

- ・よりCO<sub>2</sub>排出量の少ない、
- ・よりエネルギー消費の少ない、
- ・より汚染物の排出の少ない、
- ・リサイクルと再利用を可能にする、技術。

図1. ポスト近代社会へのトンネルルート

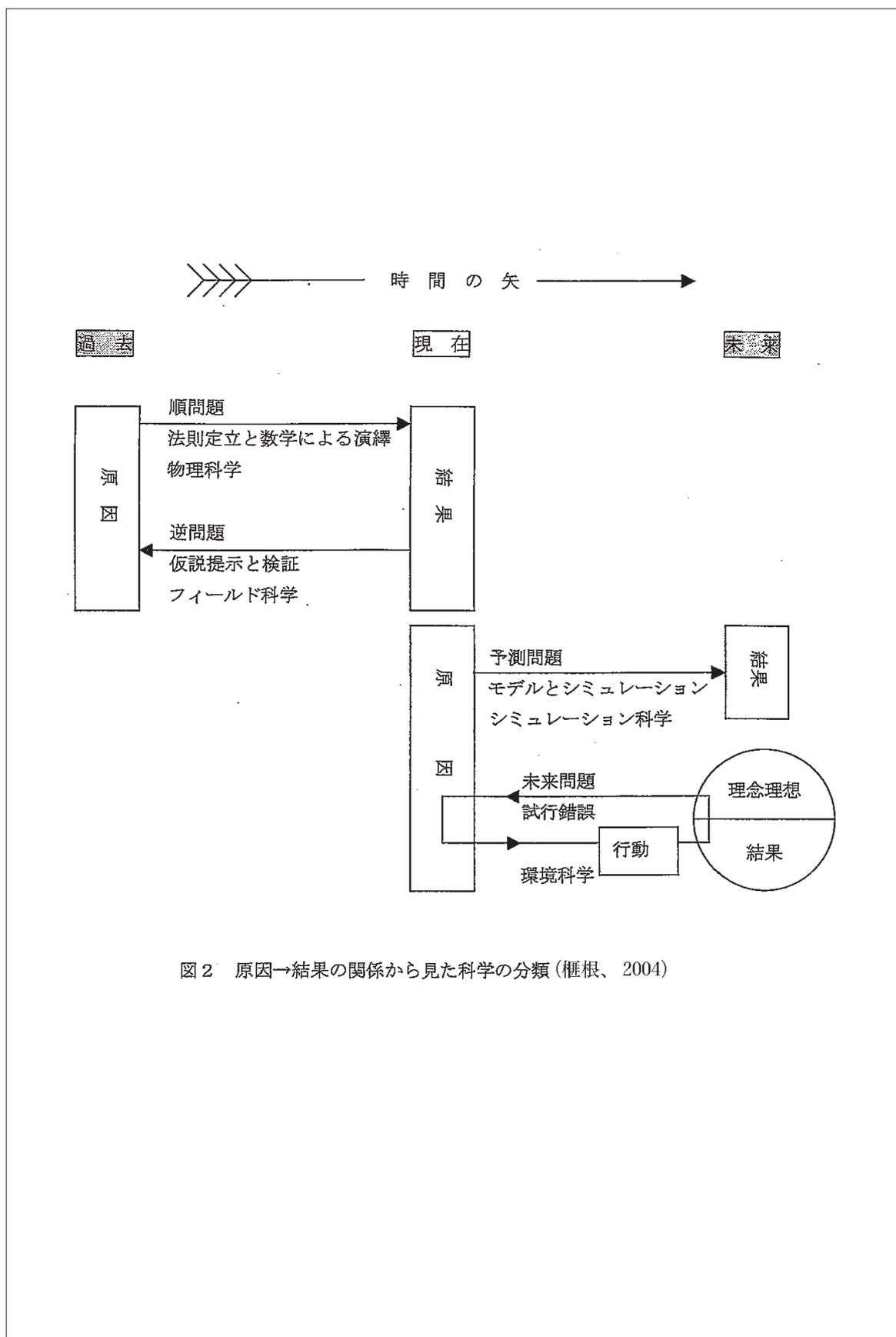


図2 原因→結果の関係から見た科学の分類(梶根、2004)

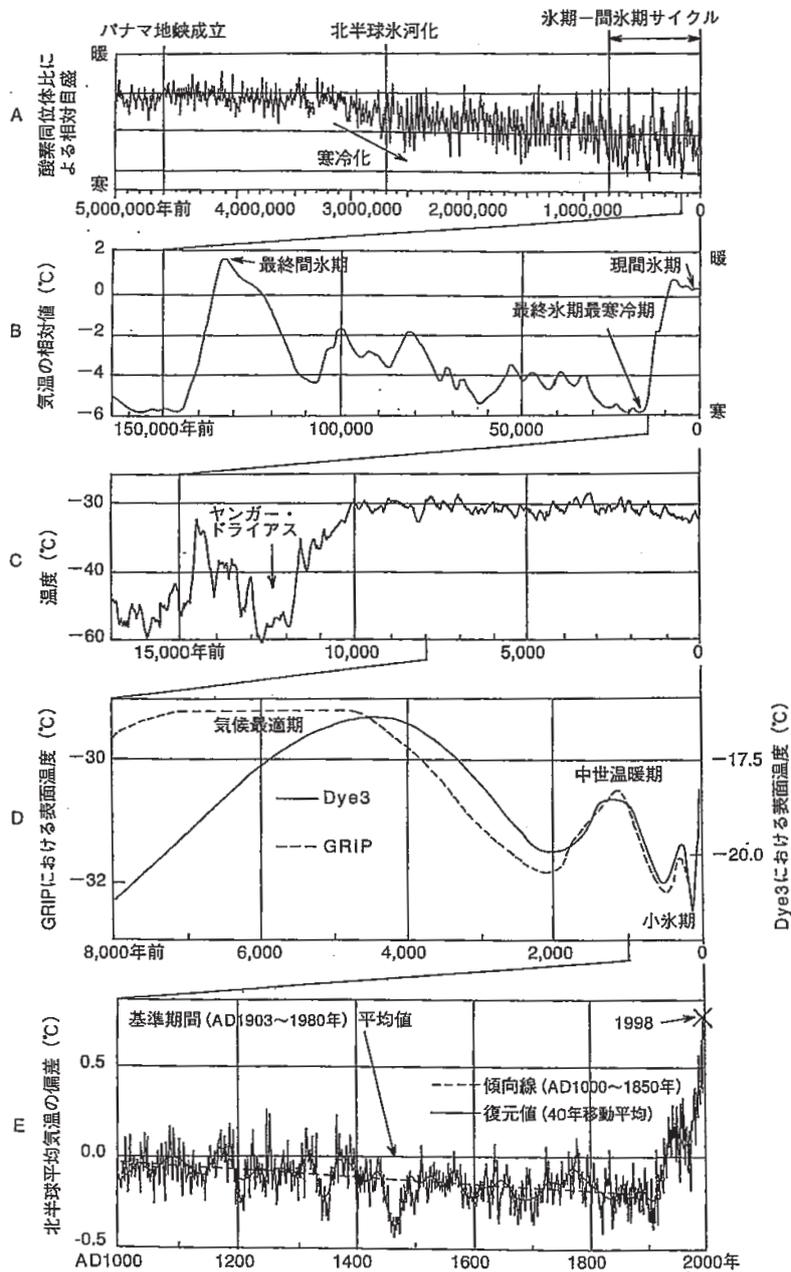


図3 様々な時間スケールで復元した気候変化 (榎根, 2002)

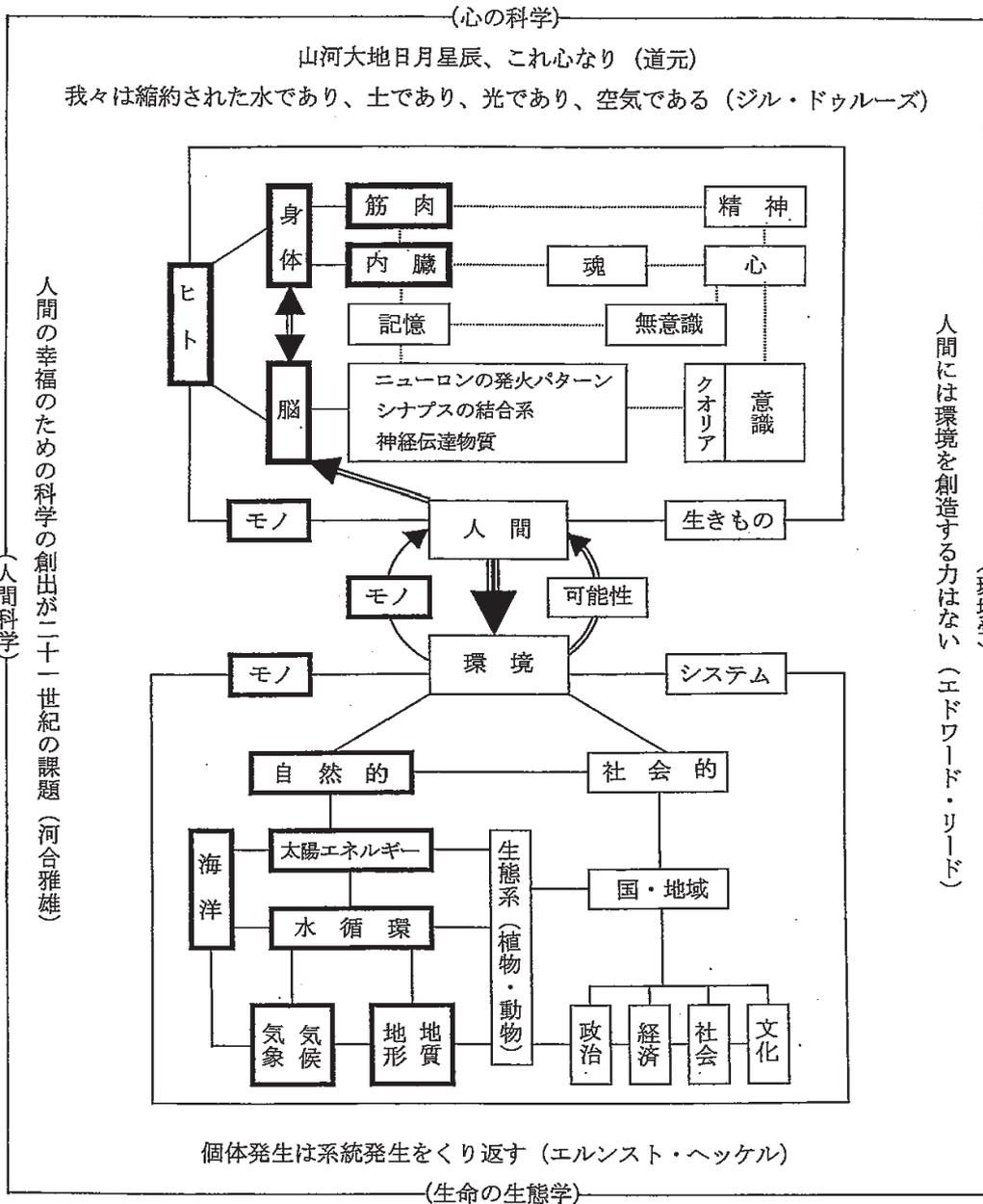
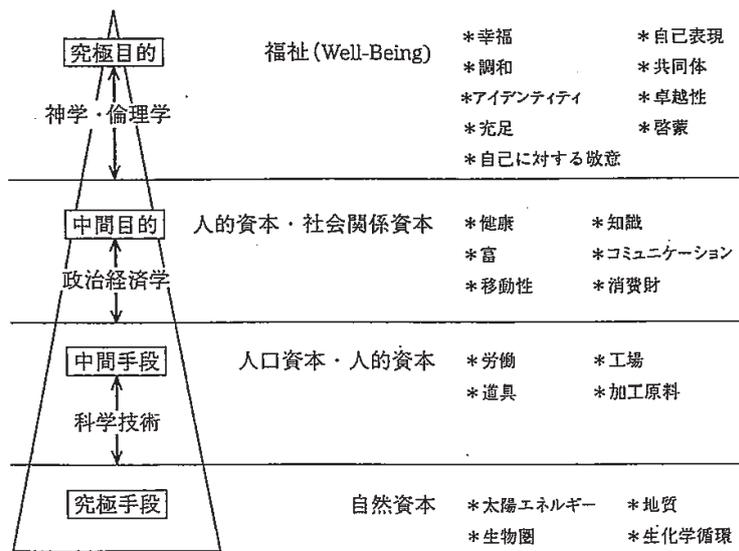


図4 人間と環境の関係について分かったこと・分からないこと  
太枠は物理主義でほぼ捉えられた世界



[出典] Meadows, D. (1995) "Indicators and Information Systems for Sustainable Development", Satterthwaite, D., ed., *The Earthcan Reader in Sustainable Cities*, Earthscan, 1999, p 366, Figure 17.1.

図5 究極目的へ向かう科学技術、政治経済学、倫理学等の階層構成 (諸富、2003)

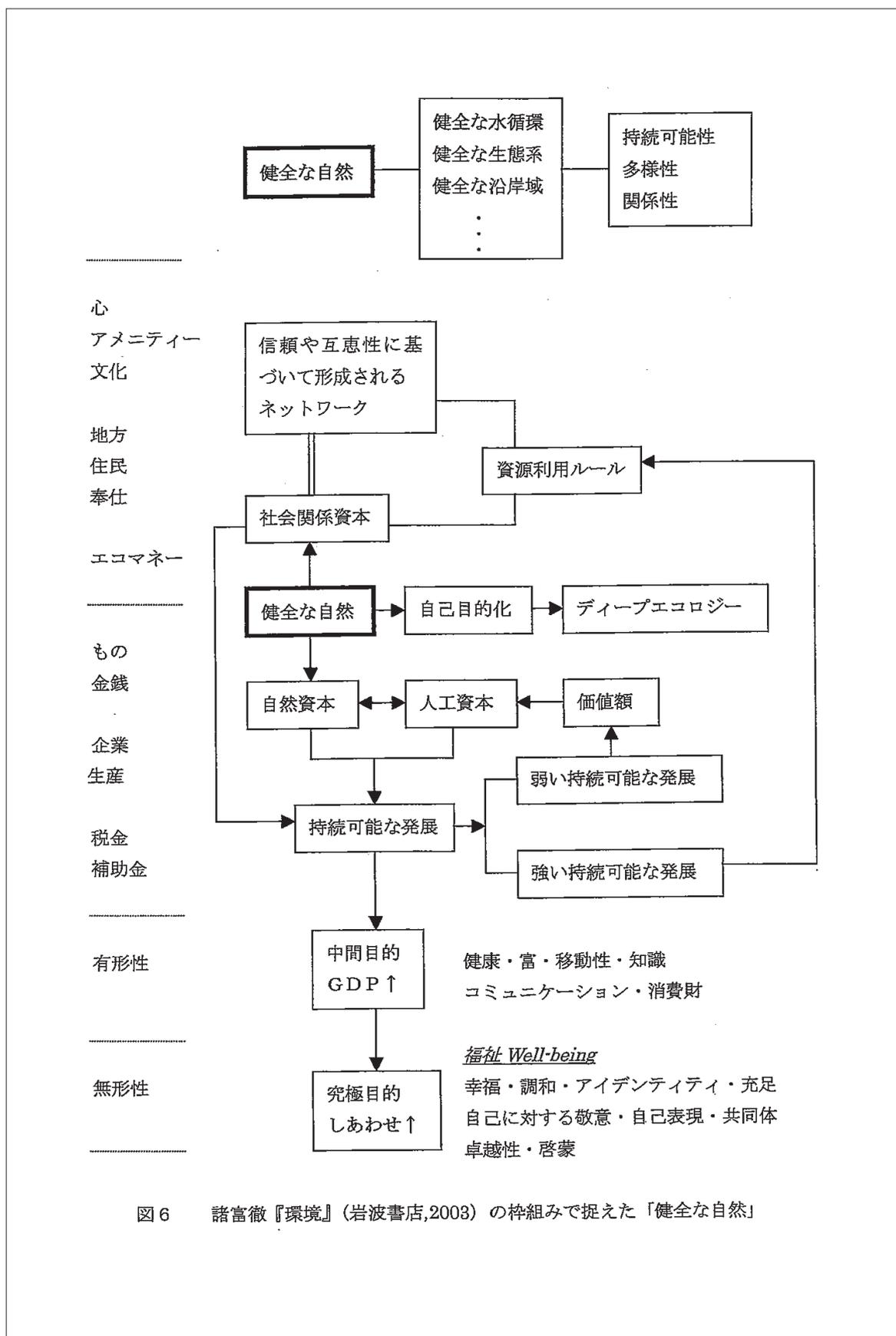


図6 諸富徹『環境』（岩波書店,2003）の枠組みで捉えた「健全な自然」